

中国仏教における鳩摩羅什

——小乗に対する態度を中心に——

采 畢 晃

鳩摩羅什は中国に本格的な大乘思想を伝えた、と評される。では、鳩摩羅什が伝えようとした思想と中国人が受け取った思想とは合致していたのであろうか。ここでは、小乗・阿毘曇に対する態度に着目して考察していきたい。

鳩摩羅什自身の思想を知るには鳩摩羅什自身の著作に依るに如くはないが、残念ながら、現在、鳩摩羅什自身による単独著作は一部も伝わっていない。鳩摩羅什自身の言葉を見ようとすれば、『大乘大義章』・『注維摩詰経』を参照するしかない。

この二書にある鳩摩羅什の言葉を見ると、小乗は常に大乘に否定されるべきものとして語られていることに気付く。

最も特徴的なのは、三十四心と四相に関する議論である。鳩摩羅什は、これらは皆仏滅後の阿毘曇学者が勝手に言い出したことであつて、仏説ではないとする。しかし、実際に検討してみると、いずれの概念も、大乘仏教においても、『大智度論』のみならずいくつかの論書で議論されている問題であり、別の場所では鳩摩羅什自身がそれらの概念を援用している例さえある。また、『成実論』が毘曇を破していることを問わずして理解したことをもつて、鳩摩羅什は僧叡を自らが伝訳する経論を担う者として称えている。

このように、鳩摩羅什は阿毘曇批判を中心として自説を展開していることが分かる。その論理は、時として自己撞着を引き起こすほどのものであり、鳩摩羅什自身の思想を素直に表明したものと受け止め難い。何らかの意図をもつて敢えて極端な表現を採つたと考えるのが自然であるように思われる。

一方、中国人はどのように鳩摩羅什の教説を受け止めていったのであろうか。鳩摩羅什と接触を持った四人について検討してみると、その対応が一樣ではないことが分かる。

僧肇は、『注維摩経』において、大乘と小乗との対比をかなり意識して註している。『注維摩詰経』に収録されている僧肇の注は鳩摩羅什の注のほぼ倍である。それを考慮しても僧肇の大乘と小乗との対比に対する関心は並々ならぬものがあると云わねばならない。

道液『浄名経集解関中疏』二巻は、現行『注維摩詰経』に収められていない僧叡の注が収められている点で非常に貴重なものである。これを見ると、僧叡は、単に大乘の方が勝れていると主張するだけではなく、小乗に対する批判に基づいて大乘について述べており、鳩摩羅什が主張している大乘観にかなり忠実であると言えよう。また、『出三藏記集』には僧叡による序文がかなり収められている。これらを検討すると、僧叡は鳩摩羅什と出会うことによつて激しい思想的転換を迫られていたことが窺えるのであり、大乘・小乗の関係についても明確な価値的判断を下し得ていたと考えられる。

慧遠は、鳩摩羅什の死後においても、『達摩多羅経』に対する序文において、闍賓の小乗禪師である達磨多羅・仏大先の教え

を指して、「勸發大乘」と評する。これは、鳩摩羅什が説く「大乘」とは明らかに意味が異なっている。慧遠は、大乘や小乗の別は教えそのものの別ではなくその教えを受け継ぐ人や時代によるものであると考えていた。このような見解が『大乘大義章』中で鳩摩羅什が主張する意見に反するものであることを、慧遠は重々承知であつたらう。してみると、慧遠は、鳩摩羅什が主張する大乘と小乗の峻別には、むしろ反感を持つていたのではないかとさえ考えられる。

『注維摩詰經』における竺道生の注を見てみると、鳩摩羅什や僧肇とは対称的な態度を取っていることが窺われる。竺道生の注釈では、大乘・小乗を対比させたものは皆無であり、むしろ、右に挙げたように、大乘・小乗の区別を拒否するかのような注釈を施しているのである。これは『法華經疏』にも窺える。竺道生は、大乘・小乗ということに関しては、羅什よりは慧遠により近い思想をもつていたのではないかと考えられる。

また、『高僧伝』『統高僧伝』を見ると、阿毘曇・小乗研究が、鳩摩羅什没後も依然として非常に盛んであつた様子が窺われる。いま、鳩摩羅什が依拠したと伝えられる『大智度論』の研究者の中からだけでも、志念・慧浄・慧善の三人を見出すことができる。いずれも、何人もの弟子を持つ大学匠である。中国人にとつて鳩摩羅什の意図がいかに浸透し難いものであつたかを物語るものである。

以上のことから、鳩摩羅什は、慧遠を始めとする中国仏教者達が大乗をも阿毘達磨で解釈しようとしていたことに對し、警告を發しようとしたのだと考えられる。『大乘大義章』第二問答中に

おいて、仏滅後に大乘と小乗が分かれたことを一言申し添えなくてはならなかつたこともこの考えを補強する。小乗から大乘へのドラスティックな転回を自ら経験した鳩摩羅什の目には、中国の大乘と小乗を十分にわきまえない状態は、大変な混乱と映つたであらう。鳩摩羅什は、中国人の求めに応じて新たな經論を翻譯するとともに、先ずそのような混乱状況の改善を図るべきだと考えたのではないだろうか。

一方、その鳩摩羅什の教えを承けた中国人の理解の程度は、かなり区々であつたと言わねばならない。胡臧から鳩摩羅什に師事していた僧肇や、訳經に當つて主導的な役割を果たして羅什につき従つていた僧叡は、鳩摩羅什の意図する所をかなり理解していたようである。しかし、このように鳩摩羅什の意図を理解した者は少数派であつたように考えられる。それに対して、鳩摩羅什の指導を面受することがかなわなかつた廬山慧遠や独特の思想を持つていた竺道生などは、むしろ鳩摩羅什が主張した大乘と小乗を峻別しようとする考え方を示している。これは、大乘にせよ小乗にせよ仏説である限りはそれを区分すべきではない、という思想が根底にあつたからだと考えられる。鳩摩羅什以降でも、中国ではこちらの方がむしろ主流となつていったようである。

もっとも、このことはマイナスイ面としてのみ捉えられるべきことではなく、このような「仏説」に對する信頼があつたからこそ教相判釈という中国仏教独自の思想が發達したと言ふこともできよう。『成実論』を小乗として却けた智顛もまた五時八教という教相判釈において独特の思想を發揮したことはよく知られてゐるところである。